

前置詞句に対する主題役付与再考

浜崎 通世

1. 序

意味的役割が動詞の項に対して、前置詞を介して間接的に与えられる場合がある (Marantz (1984))。

- (1) a. Elmer gave two porcupines to Hortense.
- b. Elmer put the porcupine on the table.
- c. Elmer stole a porcupine from the zoo. (Marantz 1984:17-19)

(1a) において動詞 *give* のとる二つの項のうち、*Hortense* に対しては前置詞 *to* が「着点」を与える。同様に、(1b) においては前置詞 *on* が *the table* に対して「着点」を与え、(1c) では前置詞 *from* が *the zoo* に対して「起点」を与えている。以下では、動詞の項に対する主題役付与に、何らかの形で前置詞が介在している場合を全般に、「間接的主題役付与」と呼ぶことにする。

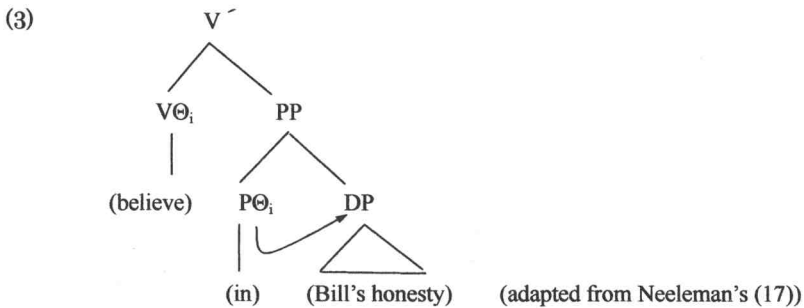
この間接的主題役付与を、Neeleman (1997) は Baker (1988a, b) などにおいて示されている、「編入」という考え方をを用いて説明しようとする。ただし、彼が主な分析の対象とするのは、動詞と前置詞とがイディオム表現を構成する、次のような例である。

- (2) John has always believed [PP in Bill's honesty].

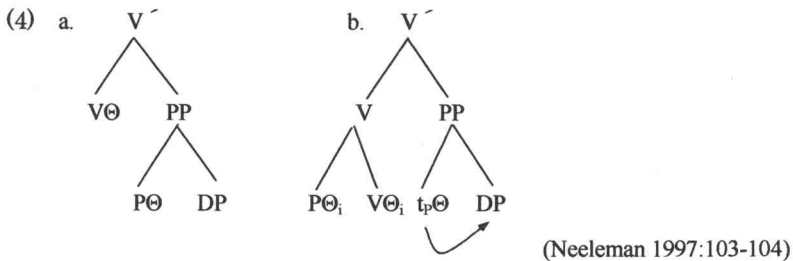
(Neeleman 1997:89)

Neeleman はこの文において、前置詞句 *in Bill's honesty* がどのような指示(denotation)を持つのか明らかではないとする。そして、前置詞句ではなく前置詞の目的語である *Bill's honesty* が、動詞 *believe* と前置詞 *in* の両方から、つまり“to believe in”のようなまとまりによって、主題役を付与されるとしている (p.90)。

Neeleman は Marantz の考え方を以下のように図示した上で、その問題点を指摘する。



節点 V および P に付記された記号 Θ に、同一指標 i が与えられているのは、動詞の持つ主題役が P を介して与えられることを示す。Neeleman はこの同一指標付与を、主題役一致 (**theta-role matching**) と呼び、このプロセスが最大投射 PP を越える操作であるという問題を、指摘する。そして、以下のような前置詞編入分析を提案する。



動詞への前置詞編入により、(4a) の構造から(4b) の LF 構造が派生される。この派生構造において、P の痕跡 *tp* から DP への主題役付与、および編入された P と V との間の主題役一致が、いずれも最大投射を越えることなく、行われることになる。

しかし、前置詞句補部に対する主題役付与について考える場合、前置詞が動詞とイディオム表現を構成する場合だけではなく、前置詞がより豊かな意味的内容を有する場合についても考察が必要ではないか。実際 (1a-c) の例に見るように、前置詞を介する主題役付与を考えるにあたって、Marantz は前置詞が動詞とイディオム表現を構成しないような例も含めて、議論している。このように、Marantz にとって「間接的主題役付与」とは、動詞がとる前置詞句全般を対象とするものである。したがって、前置詞編入分析が前置詞句全般に対する解決案となりうるのかどうか、検討を要する問題である。

本稿では、拙論 (2007 その他) での議論をまとめ直し、前置詞編入による「間接的主題役付与」に対して、前置詞編入を伴わない、前置詞句全体への主題役付与による「間接的主題役付与」の可能性を検討する。また、上記二通りの「間接的主題役付与」の両方を認める、いわば折衷案と、前置詞句全体への主題役付与のみを認める案の二つを、提示する。さらに、前置詞句補部が多くて一つであるという Neeleman の一般化を、主題役付与の方法に関する有標・無標の観点から説明することを提案する。

2. 二重前置詞句補部構文

Neeleman が前置詞編入分析を提案する一つの根拠は、動詞が二つ以上の前置詞句補部をとらないという観察である。

- (5) a. *to tell to someone about something
- b. *to supply to someone with something

c. *to ask of someone for something (Neeleman 1997:123-124)

(5a-c) では、動詞が二つの前置詞句補部をとり、非文となっている。しかしこれらの動詞が前置詞句補部を一つだけとっている場合には、文法的である。例えば (6a-b) では、(5a) において *tell* がとっている *about* PP と *to* PP のうち、どちらか一方のみが補部の位置にある。

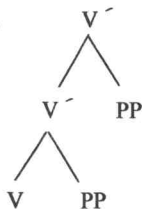
(6) a. to tell someone about something

b. to tell something to someone

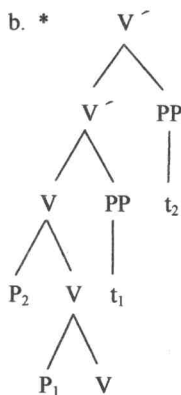
(ibid.)

Neeleman は、(5a-c) の非文法性を次のように説明する。もし前置詞句補部の主要部が動詞に編入されるなら、動詞が二つの前置詞句を補部とする場合には、一つの動詞に対して二つの前置詞が編入されることになる。その結果、(7a)のような構造から(7b)のような構造が派生されることになる。

(7) a.



b. *



((7b)=Neeleman's (57))

Neeleman は、LF における前置詞編入を一種の複合語形成とみなし、二度の前置詞編入が、Selkirk(1982) の第一次投射の条件 (the First Order

Projection Condition) に違反すると主張する。この条件によれば、複合語を構成する語と語の間に主要部と項の関係がある場合、両者は姉妹関係になくてはならない (Neeleman 1997:127)。(7b) の構造では、最初に低い位置にある前置詞句の主要部 P_1 が編入され、続いて高い位置にある前置詞句の主要部 P_2 が編入されている。しかし P_2 と主要部 V (最も低い位置にある V) が姉妹関係にないため、両者間の主題役一致は第一次投射の条件に違反する。

しかし Neeleman 自身指摘するように、こうした分析が妥当であるためには、(8a-b) のように、動詞が二つの前置詞句補部を持つ可能性がある場合について、検討が必要である。

(8) a. Ellen talked to Helen about the problem.

b. Ellen talked with Helen (about the problem).

(Levin 1993:208)

Neeleman は、これら二つの前置詞句のうち、*about* PP の方を付加部であるとする。したがって、動詞が二つ以上の前置詞句補部をとらないという一般化は、そのまま保たれることになる。

しかし *about* PP は従来、動詞がとる二つの前置詞句のうちの一つとして生起する場合であっても、補部として分析されることの多かった前置詞句である。例えば以下に示すような、*do so* に関する例である。

(9) a. John talked to Bill about Harry on Sunday, but he didn't do so on Thursday.

b. *John talked to Bill about Harry, but he didn't do so about Fred.

c. *John talked about Harry to Bill, but he didn't do so to Fred.

(Jackendoff 1977:65)

do so が talk to...about... 全体に対応している(9a)は文法的であるが、*about* PP または *to* PP が do so に対応する部分から取り残されている場合には、(9b-c)に示すように、非文法的である (Jackendoff 1977:65)。前置詞句が付加部であると考えられる場合には、do so に対応する部分から外れていたとしても、非文法性は生じない。

(10) Joe bought a book on Tuesday, but Sim did so on Friday.

(Jackendoff 1977:58)

(10)では、時を表す副詞的語句 on Tuesday が、do so に対応する部分から外れているが、文法的である。

Neeleman は do so を用いたテストの有効性について懐疑的である (note 15)。しかし、仮に do so テストに問題があるとしても、他にも *about* PP を補部とする理由がある。例えば、(11)における二つの前置詞句の語順は、自由である。

(11) a. I talked to my doctor about the problem.

b. I talked about the problem to my doctor.

(Radford 1988:352)

(11a) において、*about* PP は *to* PP に後続しているが、(11b) においては同 PP に先行しており、どちらの語順も可能である。こうした語順の自由さは、Jackendoff(1990:445) や Radford(1988:352) の言うように、これら二つの前置詞句がいずれも、動詞の補部であるためと考えられる。¹ もし二つのうちどちらかの前置詞句が付加部であるなら、こうした語順の自

由さは失われ、必ず補部が付加部に先行するからである (Radford 1988:235)。

- (12) a. He worked at the job at the office.
b. *He worked at the office at the job.
- (13) a. He laughed at the clown at ten o'clock.
b. *He laughed at ten o'clock at the clown. (Radford 1988:235)

(12a) においては、補部 *at the job* が付加部 *at the office* に先行している。しかし (12b) においてはその順序関係が逆となり、非文となっている。(13a) においては補部 *at the clown* が付加部 *at ten o'clock* に先行しているが、(13b) ではその順序関係が逆となり、やはり非文である。

これに対して、Neeleman (1997:125-126) が *about* PP を付加部とする主な理由は、以下の通りである。前置詞句が動詞の補部となる場合、①一般に動詞と前置詞句の主要部との間にイディオム的な選択関係があり、②動詞は一つの特定の前置詞を選択する。しかし前置詞 *about* の生起は動詞の意味から予測されるので、動詞との間にイディオム的な選択関係があるとは言えない。また、イディオム的な選択関係がある場合とは異なり、一つの特定の前置詞が動詞によって選択されるのではなく、意味的に動詞と整合性のある前置詞であれば、*about* に代わって主要部として生起することがある。²

しかしこうした Neeleman の主張は、イディオム的な選択関係を、前置詞句を補部とする上での前提条件とする点で、問題がある。確かに、前置詞句が動詞の補部となる多くの場合、(2) の例のように、前置詞句の主要部と動詞とが一体となってイディオム表現を構成する。しかしそうした分析が当てはまらないと考えられる例も存在する。例えば、(1b) に示した動詞 *put* である。

- (14) Elmer put the porcupine in the box/on the table/under the hedge,
etc. (Marantz 1984:32)

上記の例において、動詞 *put* と前置詞句主要部である *in*、*on* および *under* との間には、イディオム的な選択関係があるとは言えない。これらの前置詞は、それぞれ独自の意味を有するのであって、*put* との結合によって初めて特定の意味を持ちうるのではないからである。したがって、もしこれらの前置詞句を *put* の補部とすることが妥当であるなら、³ 前置詞 *about* が動詞とイディオム的な結合を見せないことからすぐに、それを動詞の補部ではないと言うことはできないと思われる。⁴

以上のような理由により、二つの前置詞句補部をとる動詞の存在を認めるなら、Neeleman の前置詞編入分析に対して一つの問題を提起することになる。前置詞編入分析によれば、第一節で述べたように、二つの前置詞句補部がある場合、前置詞が二度同じ動詞に編入されることになり、「第一次投射の条件」により排除されるからである。

こうした問題を回避する一つの方法として、二重前置詞句補部構文において、前置詞編入が一度しか起こっていないとする分析が考えられる。この可能性を検討するために、まず、上記の *put* 類の動詞のとり前置詞句補部に対する主題役付与について、考える。これらの動詞のとり前置詞句補部は、(15) に見るように、代用表現によって表すことが可能である。

- (15) a. Irving put the books [on the shelf]/ there / away.

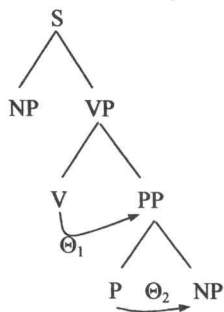
- b. Sheila put the clothes [in the closet]/ inside / on.

(Jackendoff (1973), cited in Hestvik (1991:481))

したがって、これらの前置詞句は、独立の意味的単位となると考えられる (Hestvik 1991:481)。Hestvik (1991:475) は、*put* 類の動詞を次のように

分析している。

(16)

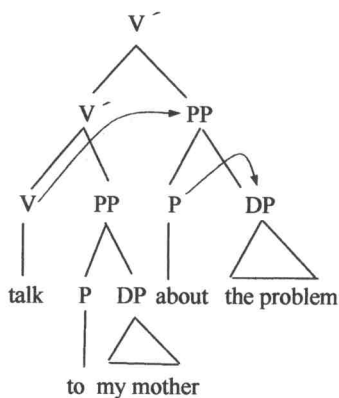


(Hestvik 1991:475)

(16) の図において、V は PP に主題役を与え、さらに主要部の P が目的語の NP に、主題役を与えている。⁵

こうした前置詞句全体に対する主題役付与を認めるなら、*about* PP に対してもまた、*put* 類の補部となる前置詞句の場合と同様に、以下に図示するような形で主題役が付与される可能性がある。⁶

(17)



(17) の図において、動詞は *about* PP 全体に主題役を与え、さらに前置詞

about がその目的語に主題役を付与している。このように、*about* PP を *put* 類の動詞の補部となる前置詞句と平行的に捉える考え方には、*about* PP に対応する代用表現が存在しないという問題があるが、前置詞の交替が可能である点では、それと近い性質を持つと考えられる。⁷ そうすると、二重前置詞句補部構文において、動詞に編入されるのは前置詞 *to* のみとなるので、第一次投射の条件に抵触しないことになる。

3. *to* PP を巡って

前節では、Neeleman の前置詞編入分析に対して、(16-17) に示されるような、前置詞句全体への主題役付与の可能性を論じた。ここで生じる一つの問題は、前置詞を介する主題役付与、すなわち「間接的主題役付与」に、二つの異なるプロセスを認めることになる、ということである。つまり、前置詞編入と前置詞句全体への主題役付与である。典型的には、動詞とイディオム表現を構成する前置詞句は、前置詞編入の適用を受け、それ以外の前置詞句補部は、前置詞句全体に対する主題役付与の適用を受ける、ということになる。

二重前置詞句補部構文については、Neeleman が *to* PP と *about* PP のうち後者を付加部であるとして、第一次投射の条件に関する問題を回避しているのに対して、前節では、*about* PP も *to* PP と同じく動詞の補部であるとした上で、*about* PP は前置詞編入ではなく前置詞句全体への主題役付与の適用を受けるとして、同じ問題を回避することになる。

先ほど述べたように、Neeleman は補部の前置詞句の特徴として、動詞と前置詞句の主要部との間に、イディオム的な関係があることを挙げている。*about* PP はこの基準に合致しないというのが、Neeleman がこの前置詞句を付加部であるとする一つの理由であり、また、こうした基準に合致しなくとも、動詞の補部として認めるべき場合があり、*about* PP はそうした事例のうちの一つであるというのが、前節での結論である。どちら

の考えをとるにしても、*to* PP は *about* PP に比べるとイディオム性が強い、ということが前提になっている。

この結論を一つの可能性と認めた上で、本節では *to* PP の性質について検討し、もう一つの可能性について論じる。まず以下の例について考える。

(18) (= (8))

a. Ellen talked to Helen about the problem.

b. Ellen talked with Helen (about the problem).

(19) Ellen chitchatted with/*to Helen (about the problem).

(Levin 1993: 209)

(18a-b) に示すように、動詞 *talk* は *to* PP と *with* PP の両方をとる。それに対して (19) に示すように、同じ会話を通じての伝達的な動作を表す動詞であっても、*chitchat* は *with* PP だけをとる。

talk と *chitchat* とのこのような違いは、それぞれの動詞の意味的な性質から、導かれると考えられる。例えば動詞 *chitchat* は、会話への参加者同士の双方向的な活動(spoken interactions between two or more participants (Levin (1993:209)))を表す動詞であるので、参加者を示す *with* をとることはできても、着点を示す *to* をとることはできない。この前置詞 *with* の使用は、Levin (1993:200-202) の、社会的相互作用の動詞(verbs of social interaction) の特徴の一つである。これらの動詞は、出来事に対する二人以上の参加者を要求し、参加者全体を集合的に主語として表す場合、自動詞として用いられる。

(20) a. The committee bantered.

b. Bill and Kathy married.

一方、参加者のうちの一部を主語として表す場合には、残りの参加者を前置詞 *with* の目的語として表すか、あるいは動詞の目的語として表す。

- (21) a. Brenda bantered with Molly.
b. Bill married Kathy.

Levin (1993: 201) は、*chitchat* 類の動詞もまた、社会的相互作用の動詞に分類される可能性を示唆している。結局、「社会的相互作用」のような双方向的活動を表す動詞である *chitchat* は、*with* のみを取り、双方向的活動だけではなく、一方通行的な活動も表す動詞の場合には、*to* と *with* の両方が許容されると、考えられる。⁸ 以上のように、前置詞 *to* は *with* と対立する意味を有する。また、動詞 *talk* がこれら二つの前置詞をとるということは、恣意的な選択の結果ではなく、意味的な裏付けのある現象であると考えられる。こうした理由から、動詞 *talk* のとる *to* PP と *about* PP がいずれも、前置詞編入の対象とはならない可能性もある。

以上のような議論から、間接的主題役付与全般について LF における前置詞編入分析を採らないとするなら、⁹ 二重前置詞句補部構文は、LF における前置詞編入と第一次投射の条件による排除を、免れることになる。しかし、二重前置詞句補部構文が原理的に排除されないとしても、一般に前置詞句補部は多くて一つであるという事実が、Neeleman の言う通り存在するなら、それについては別の説明が必要となる。この点について以下の原理を考える。

(22) 直接項の原理

無標の場合、項をとる要素はその項に対して、直接に意味的役割を与える。

(23) 語彙的例外原理

(有標性に対する) 例外は、語彙項目の語彙項目エントリーに、特に記載されなければならない。

(Marantz 1984:22)

(22) の直接項の原理により、動詞が間接的に主題役を与えるのは、有標の場合である。また (23) の語彙的例外原理により、(22) によって有標とされる場合については、語彙項目エントリーごとに記載されなければならない。もし語彙的例外原理に関して、「語彙的な例外事項は最小限に制限される」という旨の、比較的ゆるい制約が存在すると仮定するなら、二つの前置詞句補部をとる *talk* のような動詞は、例外的に二つの前置詞句をとる点で、有標性が高いということになる。

4. まとめ

本稿は、1 節でも断ったように、拙論 (2007 その他) での議論を整理して、まとめなおしたものであり、動詞の項に対する主題役付与に、前置詞が何らかの形で介在している場合について、若干の考察を行ったものである。具体的には、こうした「間接的主題役付与」を、LF における前置詞編入を伴う過程として説明しようとする試み (Neeleman (1997)) に対して、前置詞編入を伴わない、前置詞句全体への主題役付与によって説明する可能性を検討した。また、上記二通りの「間接的主題役付与」の両方を認める、いわば折衷案と、前置詞句全体への主題役付与のみを認める案の二つを、提示した。さらに、前置詞句補部が多くて一つであるという Neeleman の一般化を、主題役付与の方法に関する有標・無標の観点から説明することを提案した。

注

- 1 Larson (1990:607-609) は、Jackendoff (1990) に対する反論という形で、いくつかの根拠から *to PP-about PP* を基本語順としている。しかし、仮にその主張が正しいとしても、直ちに *about PP* を付加部とすることはできない。Larson が Baker (1988) の UTAH にも言及しつつ主張するように、項の統語的実現が主題役階層に基づくのであるなら、動詞に後続する二つの前置詞句の語順は、単にこれらの前置詞句の間の、主題役階層上の関係を反映しているに過ぎない可能性がある。なお Larson (1990:611-613) は、Jackendoff の主張する自由語順について、【もしそれが正しいなら】二つの前置詞句が主題役階層において固定されていない可能性を示唆している。いずれにせよ、仮に *to PP-about PP* を基本語順とするにしても、すぐに *about PP* を付加部と結論付けることはできない。
- 2 Neeleman の提示する例はオランダ語である。英語の場合には、動詞 *talk* の前置詞句補部の主要部として、*about* の代わりに *concerning* を用いることができる (Dixon 1990:141)。
- 3 Radford (1988:chap. 5) 中の、動詞 *put* に関する議論を参照のこと。
- 4 「動詞と前置詞とがイディオム表現を構成する場合に限り、前置詞句補部とする」といった形で、前置詞句補部の定義として、動詞と前置詞とのイディオム性を捉えるとしても、Neeleman は同じ *about PP* を、(8) のような場合においては付加部、(6a) においては補部としている点について疑問が残る。(8) のように二つの前置詞句のうちの一つとして生じる場合には付加部であり、(6a) のように他に動詞のとり前置詞句が存在しない場合には補部である、というのであれば、循環論法である。
- 5 以下の Baker (1988a: 242) の記述も参照のこと。

“...the P determines a certain range of interpretations that the NP can have, and the V then further limits that range.... Therefore, it seems that these semantic facts indicate that in benefactives, instrumentals,

and some locatives, the P theta-marks the NP and the V theta-marks the resulting PP.”

- 6 (17)の句構造自体は、Neeleman の仮定する句構造に基づいている。この場合、動詞 talk と *about* PP との構造的関係は、Neeleman 自身の依拠する、m 統御に基づく主題役付与条件に合致する。
- 7 前置詞の交替については、注 2 を参照。
- 8 前置詞 *with* と *to* については、Dixon (1991: 141) にも関連する記述がある。

“*Chat, gossip, converse, communicate, quarrel and argue* generally refer to reciprocal activity; they should either have a plural Speaker NP or else an Addressee NP introduced by *with* (rather than *to*), e.g. *John and Mary chatted* or *John chatted with Mary*. *Talk and speak* may also be used reciprocally, taking *with*, but they may alternatively have an Addressee introduced by *to*:...”

- 9 この結論を推し進める上で問題となるのは、イディオム表現である。一つの問題は、動詞とイディオム表現を構成する前置詞が、果たして固有の意味を有するのかという問題である。もう一つは、イディオム表現が LF において、編入などの手段により一つの構成素になっていないなら、イディオムの意味解釈をどのように考えたらよいのだろうか、という問題である。

参考文献

- Baker, Mark (1988a) *Incorporation: a Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Baker, Mark (1988b) “Theta Theory and the Syntax of Applicatives in Chichewa,” *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 353-389.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Mass.

- Dixon, Robert, M. W. (1990) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*, Oxford University Press, New York.
- Hestvik, Arild (1991) "Subjectless Binding Domains," *Natural Language and Linguistic Theory* 9, 455-497.
- 浜崎通世 (2005) 「主題役付与と前置詞句」, 『愛知教育大学研究報告』 第 54 号 (人文・社会科学篇), 107-113.
- 浜崎通世 (2007) 「前置詞句に対する主題役付与」, 溝越彰他編『英語と文法とー 鈴木英一教授還暦記念論文集』 195-206, 開拓社, 東京.
- Jackendoff, Ray (1973) "The Base Rules for Prepositional Phrases," S. Anderson and P. Kiparsky (eds.) *A Festschrift for Morris Halle*, 345-356, Holt, Reinhart and Winston, Inc., New York.
- Jackendoff, Ray (1977) *X-bar Syntax: A Theory of Phrase Structure*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Jackendoff, Ray (1990) "On Larson's Treatments of Double Object Constructions," *Linguistic Inquiry* 21, 427-456.
- Larson, Richard (1990) "Double Objects Revisited: Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Marantz, Alec (1984) *On the Nature of Grammatical Relations*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Neeleman, Ad (1997) "PP-Complements," *Natural Language and Linguistic Theory* 15, 89-137.
- Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar: A First Course*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Selkirk, Elisabeth (1982) *The Syntax of Words*, MIT Press, Cambridge, Mass.